

前3世紀、サラピス神崇拜のデロス島への伝播

中尾恭三

はじめに

アレクサンドロス大王の死（前323年）から、エジプトのプトレマイオス朝滅亡（前30年）までのおよそ300年間は、ヘレニズム時代と区分されている。ギリシア・マケドニア人を支配階級とするヘレニズム諸国家が、地中海東部に成立し、分裂と抗争を繰り返した。ギリシア人は、以前にもまして地中海世界各地に進出し、そこでの文化に触れる機会を得たため、さまざまな文物がギリシア世界へと流入した。地中海世界内部で活発に行きかかったのは、人・物だけではなく⁽¹⁾。各地の神格とそれらに対する崇拜も、海を渡って伝えられた。そういった神格のなかで、ギリシア世界、ひいては地中海世界に広く普及したのが、エジプトを起源とするサラピス神であった。

サラピス神の起源は、ヴィルケンによる語源的研究を通して明らかにされた。サラピスという名は、エジプト語の *Wsir-Hp* を表すギリシア語オソルハピ（Osor-Hapi）から派生した。このオソルハピとは、エジプトのメンフィスで崇拜されていた聖牛アピスが、オシリス神と同一視されたために生まれた神格である⁽²⁾。このサラピス神の起源に関する彼の研究は、今日では一般に認められている。サラピス神の属性としては、地下神的特質がまずあげられる。起源が、オシリス神にまでさかのぼるため、冥府の神あるいは豊穡の神として認識されていた。アレクサンドリアでは、ギリシアのプルトン神と同一視されている。また、病を癒す神でもあった⁽³⁾。

このサラピス神は、前3世紀以降、ギリシア世界各地で崇拜が確認されるようになり、前1世紀までにはローマ世界にも普及した。サラピスという固有名詞が史料にあらわれるようになるのは、前3世紀になってからであったので、このことはアレクサンドロスによるエジプトの

(1) 本論文において「ギリシア世界」とは、地中海世界の中で特にギリシア人の都市が分布する範囲、主にバルカン半島のギリシア本土、エーゲ海島嶼部、マケドニア、トラキア、小アジア沿岸地域と設定した。

(2) Wilcken, Ulrich, *Urkunden der Ptolemaierzeit*, Bd. 1, Papyri aus Unterägypten, Berlin, 1922-1927(以下、Wilken, *UPZ* と略記), p.18ff.

(3) Tacitus, *Historiae*, 4. 84.

征服、ならびにプトレマイオス朝の創設と関連づけられてきた。サラピス神の「創設」と崇拝の伝播に関しては、今日ではフレイザの主張が通説とされている。サラピス神は、ヘレニズム時代にあって新たに生まれた神であり、その伝播もヘレニズム時代の産物である、という見解である。つまり、この神は、プトレマイオス朝国内の宗教的必要性のために創造され、アレクサンドリアのサラピス神殿からギリシア世界へと伝播した⁽⁴⁾。では、エジプトで生まれたサラピス神崇拝は、どのようにギリシア世界へと伝播したのであろうか。それは、2通りに解釈されてきた。1つは、プトレマイオス朝が伝播に大きく関与したとする説である。つまり、サラピス神崇拝伝播を、プトレマイオス朝の海外向けのプロパガンダを目的とした宗教政策とする主張である。ヴィルケン、ニルソンがこの説を支持する⁽⁵⁾。これを、フレイザは「帝国主義理論」と総称している⁽⁶⁾。もう1つは、この伝播をプトレマイオス朝の宗教政策とせず、私的伝播あるいは、ギリシアの都市によって導入されたと解釈する説である。この説をとるのは、レッグ、ブレイディ、ノック、ダウ、マギー、フレイザらである⁽⁷⁾。

「帝国主義理論」をとらない研究者の説は一様ではない。まず、レッグであるが、彼はサラピス神崇拝がエジプト外に拡散した具体的な理由を述べてはいない。だが、アレクサンドリア由来のサラピス神崇拝が、西方世界における「世界宗教」の最初の事例であり、同市がエジプト一国家に限定されず、あらゆる民族に開かれた場所であったことを、崇拝拡散の明らかな根拠であるとしている⁽⁸⁾。彼は、私的にせよ公的にせよ、人間の移動をその崇拝伝播のきっかけとしているのである。ブレイディは、デロス島へのサラピス神崇拝伝播を主にとりあげ、それはエジプト神官アポロニオスの一族によって私的に行なわれたとしている。だが、伝播者アポロニオスがデロス島へ移住した背景には、政治的要素がからんでいるとも解釈している。すなわち、キュクラデス諸島の宗主権を保持していたアンティゴノス家のデメトリオス・ポリオルケテスの死後（前283年）、プトレマイオス1世が再びデロス島を含むキュクラデス諸島の支配

(4) Fraser, P. M., *Ptolemaic Alexandria*, 3 vols, Oxford, 1972, vol.1, p.246ff.; Martin, Luther H., *Hellenistic Religions, An Introduction*, Oxford, 1987, p.73. なお、サラピス神崇拝祭儀に関して、その「創設」をアレクサンドロス大王の時代に置くか、あるいはプトレマイオス朝治下とするかで、研究者間で意見が分かれている。サラピス神崇拝のデロス島への伝播を論ずることを目的している本稿では、サラピス神崇拝「創設」問題は扱わず、あくまでプトレマイオス朝時代に国家祭儀として「導入」されたとして議論を進めていく。Cf. Shipley, G., *The Greek World after The Alexander 323-30 BC*, London, 2000, p.165ff. 藤森誠「プトレマイオス朝エジプトのサラピス崇拝創出を巡る論争史から— P. M. Fraser を中心に—」『歴史』83号、1994年、66-83頁。

(5) Wilken, *UPZ*, p.84; Nilson, M., *Geshchichte der Griechischen Religion*, 2 Teil, München, 1955, Bd.2, S.118.

(6) Fraser, P. M., "Two Studies on the cult of Sarapis in the Hellenistic World", *Opuscula Atheniensia* (以下、Fraser, Two Studies と略記), p.20.

(7) Legge, F., "The Greek Worship of Sarapis and Isis", *Proceedings of the Society of Biblical Archaeology* 36, 1914, p.85; Brady, Thomas A., "The Reception of the Egyptian Cults by the Greeks (330-30 B.C.)", *University of Missouri Studies* 10-1, 1935, p.18ff.; Nock, Arthur D., *Conversion, The Old and the New in Religion from Alexander the Great to Augustine of Hippo*, London, 1933, p.54; Dow, Sterling, "The Egyptian Cults in Athens", *Harvard Theological Review* 30, 1937, p.227ff.; Magie, David, "Egyptian Deities in Asia Minor in Inscriptions and on Coins", *American Journal of Archaeology* 57-3, 1953, p.163ff.

(8) Legge, op.cit., p.85.

権を回復したために、アポロニオスはデロス島へ移住できた、というのである⁽⁹⁾。彼の説は、崇拜伝播を私的なものととらえるが、その契機としてのプトレマイオス朝の政治的影響力を考慮に入れたものと言えよう。ノックは、デロス島でのサラピス神崇拜は、前3世紀末アンティゴノス朝の宗主権下に、私的崇拜として現れたとする。すなわち、それ以前にプトレマイオス朝が、自らデロス島に権威をおよぼしていた時期には、サラピス神崇拜に関して何ら行動をおこした形跡はないと論じ、私的伝播を支持している⁽¹⁰⁾。ダウは、アテナイでの崇拜受容を研究する中で、アテナイでサラピス神崇拜が導入された前3世紀末は、プトレマイオス朝がサラピス神に対して重要性を認めなくなった時期であると見なす。この事実は「帝国主義理論」と相反する。しかし、前3世紀末にアテナイで、サラピス崇拜結社が成立した背景には、プトレマイオス朝の好意を得る意図があったと解釈している⁽¹¹⁾。彼の説は、サラピス神崇拜伝播をプトレマイオス朝からの宗教政策としてではなく、むしろギリシア都市による宗教政策の一環ととらえる。マギーは、小アジア各地におけるサラピス神崇拜の痕跡と、ローマ帝政時代における密儀宗教化を考察している。その中で、ヘレニズム時代のサラピス神とイシス神の崇拜伝播に関して、プトレマイオス朝の影響力を完全に排除するわけではないが、交易の拡大とエジプト人傭兵をその主要因としている⁽¹²⁾。

フレイザは、ギリシア、小アジアから発見されたサラピス神崇拜とそれに関連する碑文の年代をもとにして、「帝国主義理論」批判を行ない、崇拜伝播を主導したのは、私的な人間の移動であったと主張した。前3世紀プトレマイオス朝との関係が密であった地域に、かならずしもサラピス神崇拜の存在が確認されるわけではなく、同王朝の影響下に入っていなかった都市にもサラピス神崇拜が確認される。さらに、前2世紀に入ってプトレマイオス朝の影響力がエーゲ海から後退した後に、サラピス神崇拜は前3世紀以上の拡散をみせている。これらサラピス神崇拜伝播を主導したのは、交易にたずさわった商人、エジプトから帰還した傭兵、神官、旅行者たちであり、サラピス神崇拜に個人的な関心を寄せていた人物である⁽¹³⁾。今日では、彼の説がおおむね受容されて、通説となっていると言えよう。

以上のように、「帝国主義理論」をとらない研究者の間でも、崇拜の伝播・導入の要因は2つに分類することができる。すなわち、私人の移動を通じて伝播が行なわれたのだとする説と、プトレマイオス朝の好意を得る目的で都市によって導入されたのだとする説である。しかし、いずれの説にも共通するのは、サラピス神崇拜はあくまでもプトレマイオス朝の首府アレクサンドリアから拡散したものである、という点である。しかし、デロス島においては、メンフィスから訪れたエジプト人神官アポロニオスによって崇拜が伝播しており、アレクサンドリアの

(9) Brady, *op.cit.*, p.18ff.

(10) Nock, *op.cit.*, p.54.

(11) Dow, *op.cit.*, p.227ff.

(12) Magie, *op.cit.*, p.164.

(13) Fraser, *Two Studies*, p.20ff.

存在を前提とすることはできない。すなわち、メンフィスからの崇拜伝播の蓋然性が考えられるのである。ヘレニズム時代、デロス島はギリシア世界におけるサラピス神崇拜の一大拠点であった。出土している碑文数が群を抜いていることも、そのことを示唆する。そのデロス島でのサラピス神崇拜の伝播が、従来の理解とは異なる過程を経たのであれば、ギリシア世界へのサラピス神崇拜の伝播についても、再検討が必要となる。

しかし、本論では、ギリシア世界全般にまで視野を広げることせず、対象をデロス島に限定して、同島のサラピス神殿建設碑文をあつかう。そこから、サラピス神崇拜の伝播と導入の性格を考察する。さらに、デロス島から出土したサラピス神に対する奉納碑文から、崇拜の形態を分析し、エジプトにおけるサラピス神崇拜と比較する。以上の考察から、ギリシア世界へ伝播したサラピス神崇拜の意義を探る端緒とする。

1 デロス島への崇拜伝播と神殿建設

デロス島でのサラピス神崇拜伝播を考察する上で最も重要な史料は、*Inscriptiones Graecae* (以下 *IG* と略記) XI. 4. 1299 である。これはデロス島へのサラピス神の到来と神殿建設とを記録した碑文であり、デロス島のセラペウム A で発見された円柱に刻まれている。この碑文の建立は、前 220 年から前 200 年までの間と推定されている⁽¹⁴⁾。デロス島のサラピス神殿は 3 つあり、それぞれセラペウム A、セラペウム B、セラペウム C と呼びならわされている。セラペウム A は前 220 年頃、セラペウム B は前 3 世紀の終わりから前 2 世紀の始め、前 196 年以前に建設されたと推定されている⁽¹⁵⁾。セラペウム C は、他神格を祭っていた 2 つの神殿を結合させ、サラピス神殿に流用されたものであるため、建設の年代を正確に特定することはできない。しかし、セラペウム C がサラピス神殿として、使用されるようになった年代は、前 200 から前 190 年までと推定されている。このセラペウム C は、前 180 年頃の増築を皮切りに、前 2 世紀中に、徐々に増築が行なわれたとされている⁽¹⁶⁾。

IG XI. 4. 1299 の内容は大きく 2 部に分かれており、それぞれ記録者も異なる。前半 (1-28 行) は、アポロニオス 2 世によって散文体で記されている。後半 (29-94 行) は、六脚韻による賛歌の形式をとっており、記録者はマイスタスという人物である。前者は、メンフィスからデロス島へ移住した神官アポロニオスの同名の孫であり、デロス島のサラピス神殿に仕える神官であった⁽¹⁷⁾。マイスタスは、不詳の人物であるが、おそらくはエジプト人であったと推定さ

(14) Engelmann, Helmut, *The Delian Aretalogy of Sarapis*, Leiden, 1975, p.1ff.

(15) Wild, Robert A., *Water in The Cultic Worship of Isis and Sarapis*, Leiden, 1981, p.34ff.

(16) *Ibid.*, p.38.

(17) エジプトからデロス島へ移住した人物と、彼の孫でありこの碑文の建立者は、ともにアポロニオスと同名であった。以下、祖父をアポロニオス 1 世、孫をアポロニオス 2 世とする。

れている。⁽¹⁸⁾碑文の内容は、共にデロス島へのサラピス神の到来と神殿建設のいきさつとを語るものであり、後半の賛歌がより詳細にその経緯を語っている。以下、全文の試訳をあげる。⁽¹⁹⁾

神官アポロニオスが、神の命に従って記載した。(1-2行)

すなわち、我々の祖父アポロニオス―彼は神官家出身のエジプト人であったのだが―神（の像）を持ってエジプトから訪れ、神々に奉獻し、父祖の慣習に従って祭りつづけた。そして、彼は97歳まで生きたと思われる。私の父デメトリオスが後を継ぎ、神々に仕えたあと、彼は神々への畏敬のために、神によって青銅の肖像を建てられて（功績を）称えられた。その肖像は、神殿に安置されている。彼は、61年間生きた。(2-11行)

また私が祭儀を受け継ぎ、注意深く密儀に没頭していたとき、神は私に夢の中で応えた。神のためにサラピス神殿が建設されねばならず、以前のように借りられた住まいに神がいてはならないこと。神自身が坐する場所を神自身が発見し、その場所を明示するであろうことである。(12-18行)

そして、そのことが実際に起こった。その場所は、汚物に満ちた場所であり、そこは売られるようにとアゴラの通り道で立て札に告知されていた。また、神が欲するので、購入の支払いが行なわれ、神殿が6箇月ですばやく建造された。(18-23行)

だが、ある人々が、我々と神に対して謀略を企み、神殿と私に対して、体刑を受けるか、罰金が支払われねばならないという公訴を起こしたので、神は夢の中で我々が勝利するだろうと通達した。裁判が終わり、神の言ったとおりに我々が勝利したので、私は相応しい感謝を捧げて、神々を称賛する。(23-28行)

そして、マイイスタスが、神殿のためにその創建を書き記す。(29行)

非常に称賛されるサラピスよ、あなたの無数の驚くべき奇跡が、神々の寵愛を受けるエジプトの街中とギリシア全土で語られ、あなたの配偶者イシスの奇跡も語られているのです。救済神は、よき人々に近づき、彼らよき人々は、あらゆる点において心の中で敬虔さを尊重します。(30-34行)

また、高名な（神）は、アポロニオスの祭儀が、海に囲まれたデロスで多くの話に上るようにもなさいました。はるか以前に、父の父が、多くの座席を備えた船でフォイボスの都市にやってきたときに、（神像を）かのメンフィスから運んできたのです。そこで彼は、不承不承ながら神像を借りられた住まいに安置し、あなたを供儀の香によって快い気分とさせました。それから、人生が老年の彼を殺してしまい、彼はあなたの住居に供儀を行なう息子デメトリオスを残しました。彼のために崇拜者たちは喜びを得たのです。(35-43行)

(18) Engelmann, *op.cit.*, p.25.

(19) この翻訳は底本として、IG XI. 4. 1299を使用し、Engelmann, *op.cit.* を適宜参照した。段落は内容をふまえて任意で設定している。訳文中の括弧は、文章の補足を示す。

あなたは、ある人が青銅の像を神殿に据えることを祈るのをお聞きになり、幸運にもそれを遂行されました。夜に、父の後を継ぎ奉仕している者の眠りの床に顕現されて、義務を遂行するようにお命じになりました。(43-47行)

ですが、運命が先立つ人から去ったとき、父から善い行ないを教わっていた息子は、立派に祭儀を尊重し、全てに関して日々あなたの奇跡を歌い上げ、夜眠っているときには常に、あなたのために建設される神殿がどこか示してくれるように、と祈りました。あなたが、神域に止まるために、どこでもなく、他のどの神にも属していない、永続する(神殿)が建てられ、あなたがお越しになるように。そしてあなたは、以前は名もなく、人目につかず、さらに長い時間の後、あらゆる種類の汚物で満ちている場所を示されました。(47-55行)

あなたは、夜寝床に現れておっしゃいました。「目覚めよ。そして、門のそばにある柱廊の中央へと行き、立て札に記されている短い文書を見て取れ。それをお前が理解したと思ったのなら、それは、お前が私のために、どこぞの土地を準備し、神殿を有名にする手段をお前に教えるだろう。」(55-59行)

彼はそのことに驚愕しましたが目を覚まして、ただちに(そこへ)行き、喜ばしくもその告示を発見し、不動産売買業者に、その土地が所有されるであろう代金を与えました。同時にあなたがお望みになったので、容易に神殿と香のたかかっている祭壇、そして神域が保有され、神々を称える宴のために住居に全てのもの、椅子、寝椅子が納められたのです。(60-65行)

それから、悪い「妬み」が悪人たちに狂乱を投げかけ、そこで彼らは神を崇拝する⁽²⁰⁾君を2つのむなしい訴訟へと呼び出し、何らかの体刑を受けねばならないか、何らかの罰金を支払わねばならないと書き込み、悪い訴訟を起こしました。(66-70行)

酷い恐れのために、昼も夜も神官の心に恐怖が生じていました。また、彼は涙を滴らせながら、あなたの被保護者に不名誉な罰金を生じさせないように、悲運による死を妨げるように、あなたが守ってくれるようにと祈願しました。全てを憶えている分別にしたがって、あなたはそのことを憶えておられ、夜にその者の寝床に現れてお告げになりました。「思慮でもって苦悩を放棄せよ。人のある投票は、お前に対して投げかけられているのではない。この訴えは、私自身に向けられており、他の何人も、私よりも多くを語ることはないのだから。お前は、もはや意思をくじけさせることはないのである。」(70-80行)

さて、裁判のときが訪れましたとき、神が導く裁判を聞くために、全ての市民と、同時に様々な国々の民族の者たち全員が、神殿に集められました。そこで、あなたとあなたの配偶者は、人々の中でその非常に驚くべきことをもたらしたのです。すなわち、訴訟を準備していたその者たちをあなたは黙らせたのです。あなたは、下あごの内の舌が、言葉を発することをできなくな

(20) 君とはアポロニオス2世を指す。賛歌中で、サラピス神による神託の部分を除いて、アポロニオス2世が2人称で示されているのは、この箇所のみである。それ以外の2人称表現は、すべてサラピス神に対する呼びかけである。

さったので、何者も声によって訴訟の記録を聞くことはなかったのです。救い主よ。したがって、神の計らいにより、彼らは、光に打たれて石に変わってしまったかのように、立ちつくしていた、と人々は言いました。(81-90行)

されば、全ての人々は、あなたの奇跡をその日驚き、デロス中であなたの従者に、偉大な栄光を生じさせたのです。祝福された神よ。我々の神殿にあられる神々である、あなたの同伴者さまたちもお喜びなのです。名の知られたサラピスよ。(90-94行)

2-11、35-43行では、サラピス神殿が建設される以前の2世代について簡潔に述べられている。エジプトからデロス島へ移住したアポロニオス1世は、メンフィスの神官家系出身者であった。エジプトでは神官職は世襲制であったため、アポロニオス1世は、メンフィスのオソルハピ神殿に仕える土着エジプト人であったと考えられる⁽²¹⁾。彼と息子デメトリオスは、エジプト人であるにもかかわらずギリシア風の名前でもって記されている。これは、移住にあたってギリシア神の名にちなんだ名を名乗るようになったためと考えられている。すなわち、アポロニオスはアポロン神に、デメトリオスはデメテル神に関係づけられる⁽²²⁾。アポロン神はエジプトのホルス神に、デメテル神はイシス神に同一視された神であった。

彼がいかなる理由でメンフィスからデロス島へと渡ったかについては、碑文は何も語ってはくれない。エンゲルマンの推測では、彼は経済的成功を求めてデロス島へと渡ったのだという。エジプトでは、神官であっても下層階級に属する者たちは、神殿での奉仕は恒常的なものではなく、神官職以外にも生業をもっていなければならなかった。アポロニオス1世も、おそらくそのような階級に属する神官であり、経済的に余裕がなかったのであろう⁽²³⁾。

では、アポロニオス1世がデロス島へ移住した年代は、いつ頃であったか。これに関しては、碑文の内容と建立された年代から逆算するしか手段はない。ルセルは、碑文の建立年代を前220年頃から前200年頃と推定し、アポロニオス1世とデメトリオスの死亡年齢を考慮して、アポロニオス1世の移住年代を前300年頃から前260年頃と結論づける⁽²⁴⁾。ブレイディは、ルセルの研究を承け、デロス島への移住時期をプトレマイオス1世の統治期間(前305/4年-前

(21) Cf. Herodotos, 2. 38; Diodoros, 1. 88.

(22) Roussel, Pierre, *Les cultes égyptiens à Délos du III^e au I^{er} siècle av. J.-C.*, Nancy, 1916, p.245.

(23) Engelmann, *op.cit.*, p.1, p.12. 彼の主張は、あくまで推測の域をでないが、他のエジプト人がギリシアへ渡った事例から鑑みれば、その蓋然性は高いように思われる。前4世紀末にアテナイのペライエウス港にイシス祭儀をもたらしたのはエジプトからの移住者たちであり、プリエネでサラピス神祭儀を執り行なったのもエジプト人であった。また、ローマ帝政時代の事例ではあるが、アプレイウス『黄金の驢馬』において、ザトクラスという名のエジプト人神官が確認される。以上のように、エジプト外での神殿建設、祭儀の挙行に際しても、エジプト人の関与が認められる。このような点からも、デロスへと渡ったアポロニオス1世もエジプト人であった蓋然性が高い。Cf. *Sylloge Inscriptionum Graecarum* 3, Leipzig, 1915-, 1029.32 (333/2), 281.15(313/2); Brady, *op.cit.*, p.9; Dow, *op.cit.*, p.185; Apuleius, 2. 28-9.

(24) Roussel, *op.cit.*, p.245.

283/2年)として⁽²⁵⁾いる。フレイザは、ルセル、ブレイディの研究を参照してはいるが、明確な言及をさけており、いずれの時期であっても、デロス島へのサラピス神崇拜伝播は私的行為によってであったとしている。

アポロニオス1世の移住が、政治的な意図、つまり宗教的プロパガンダを背景に行なわれたとみなされるべきか、あるいは私的行為と考えられるかについては、当時の政治情勢を考慮に入れる必要がある。前300年頃から前260年頃までの間に、エーゲ海での政事情勢はかなりの変化を見せている。前300年頃、デロス島を含むキュクラデス諸島は、海上同盟を通じてアンティゴノス朝の支配下にあった。この状況は、アンティゴノスの息子デメトリオス・ポリオルケテスが、前287年にアテナイから逃走するまで続いた。その後、前285年頃から前260年代には、キュクラデス諸島はプトレマイオス朝の影響下⁽²⁶⁾にあった。この間、前279年にプトレマイオス2世フィラデルフォス(在位:前283-前246年)を祀った祝祭がデロスで開始されている。デロス島へのサラピス神伝播が、プトレマイオス朝の政策として行なわれたのであれば、移住時期も前285年から前260年代と考えるのが妥当であろう。しかし、神殿建設がアポロニオス1世の時代には行なわれず、彼の孫の世代になってようやく実現したことから、プトレマイオス朝の宗教政策と結びつけて考えることは難しい。また、前3世紀前半にはプトレマイオス朝とアンティゴノス朝は友好関係にあったことから、アンティゴノス朝の支配時期にエジプトからデロス島へ移住した可能性も否定できない。そのため、ルセルの考えとおり、前300年頃から前260年頃と大まかな年代を設定しておき、私的にデロス島へと渡ったと考えるのがもっとも適切であろう。

アポロニオス1世の死後、息子のデメトリオスが祭儀を受け継いだ。彼の時代にはすでに、サラピスに仕える信者集団(**qerapej**)が存在していたことがうかがえる。セラペウムAから出土した別の碑文では、奉納者たちは自らを信者集団(**qerapeuontej**)と呼んでいる⁽²⁷⁾。前者の**qerapej**は名詞**qerapontej**の詩形であり、後者の**oi(qerapeuontej)**は動詞**qerapeúw**の分詞形である。両者とも「仕える、奉仕する」を意味する名詞**qerapeia**から派生した単語であり、「神に仕える者たち、崇拜者たち」を意味する。そのため、セラペウムAで祭儀を挙行していた信者集団は、少なくともデメトリオスの時代には形成されていたと考えることができる。

以上のように、メンフィスの神官家系出身のエジプト人アポロニオス1世は、前3世紀前半にエジプトからデロス島へと、個人的にサラピス神像を伴って移住を行ない、彼の後を息子デメトリオスが継いだ。彼の代にいたるまでには、サラピス神を崇拜する信者集団がデロスで形成されていた、と考えることができるであろう。

12-23、47-65行では、3世代目のアポロニオス2世が、デロス島で神殿建設を行なったいき

(25) Brady, op.cit., p.10.

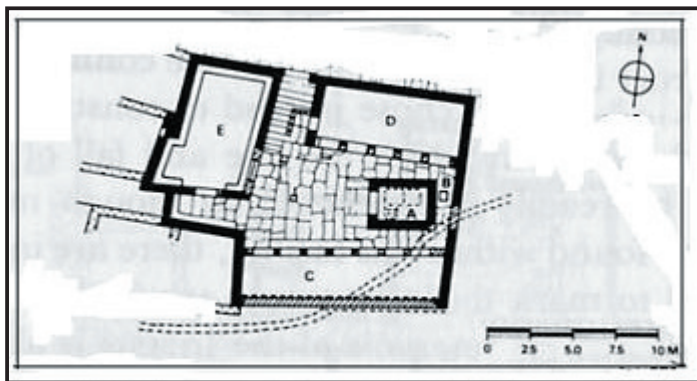
(26) Reger, Gary, *Regionalism and Change in the Economy of Independent Delos, 314-167 B.C.*, University of California Press, 1994, p.17ff.

(27) *IG XI. 4. 1217.*

さつが語られている。彼は夢の中で神の命を受け、自らの財産で地所を購入している。碑文中にもあるように、その地所とは「汚物に満ちた **koprou nestoj**」場所、あるいは「名もなく **akl eá**」「人目につかず **ašhmon**」「あらゆる類の汚物に満ちた **pepl hqota luqpwí pantoiwi**」場所であった。最初の表現 **koproj** は「排泄物、糞便」を意味する語である。2つ目の表現 **akl eá** は「不名誉な、名もない」を、**ašhmoj** は「印のない、気付かれない」を意味する。最後の **luql o j** は、ホメロス作品内での意味は、「血で穢れた」⁽²⁸⁾である。「血で穢れた」は、その場所が宗教的に穢れていることを想像させる。エンゲルマンの解釈によると、この賛歌内では19行目の「汚物に満ちた」と同じ意味で用いられているに過ぎないとされている。それは、マイイスタスはしばしばテキスト内でギリシア語の語彙を誤用しているため、それらと同じ過ちを犯しているのであろう、との推測に基づいている⁽²⁹⁾。事実、セラペウムAは都市の中心部から外れた荒廃した土地に建設されている。そこが宗教的に禁忌とされているかどうかまでは、分からないが、少なくともデロス島の共同体内で忌避されていたか、利用価値の低い土地として放置されていた可能性は十分に考えられる。このため、少なくとも神殿建設当時、デロス島のサラピス神崇拜者集団は社会的地位が低く、資金面でも余裕がなかった、と考えられる。

土地購入が行なわれてから、6箇月という非常に短い期間でセラペウムAは建設されている。この記録は、考古学的な調査とも合致する⁽³⁰⁾。発掘によって調査されたセラペウムAは、およそ横15メートル×縦13メートルと小規模である。神殿の中心となる祭壇が設置されていた部屋Aの大きさは、横4.1メートル×縦3.2メートルであり、当初、その壁は壊れた石で組まれ

セラペウムA



A: 主神殿 B: イノプス川よりの給水口 C: 柱廊
D: 諸神の神域(?) E: 祭儀用会食室

Wild, Robert A., *Water in The Cultic Worship of Isis and Sarapis*, Leiden, 1981, p.34 より作成。

(28) Engelmann, *op.cit.*, p.38.

(29) *Ibid.*, p.38.

(30) Roussel, *op.cit.*, p.19ff.; Engelmann, *op.cit.*, p.41; Wild, *op.cit.*, pp.34ff.

ていた。部屋 A の東に隣接して窪み B が発見されており、ここを通じてイノプス川から水をくみ出していた。部屋 A を取り囲む中庭は横の最大が 14 メートル、縦の最大が 6 メートルである。中庭の南側には柱廊 C が、北側にはサラピス神以外の諸神を祭ったと推定されている部屋 D が存在するが、ともに後の時代に増築されたものである。部屋 E は祭儀用会食室であり、およそ 40 平方メートルである。ここで、祭儀の一部を構成する宴会が催されていた⁽³¹⁾。

以上のように、アポロニオス 2 世によって建設されたセラペウム A は非常に小規模のものであった。そのことは、セラペウム B、セラペウム C との比較からも確認される。神殿規模と平行して、神殿建設当初の崇拝者集団自体も比較的小規模であったであろう。崇拝者として受け入れられた者のみが参加できた宴会が催されていた部屋 E が、多人数を収容できない広さであることもその証左といえる。この部屋 E で発見された大理石の座椅子は、崇拝者集団によって奉納されたものであるが、22 名の人物の名前が刻まれている⁽³²⁾。そのうち 20 名はデロス人、残りの 2 名はパロス人である。パロスはデロス島と同じキュクラデス諸島に属するパロス島に存在した都市である。これらの人物が、サラピス神を崇拝する信者団であった、という記述はテキスト内には存在しない。しかし、前 220 年頃から前 200 年頃のセラペウム A 建設の後、前 196 年までにはセラペウム B が新たに建設されており、祭儀・奉納の中心もそこに移行したと考えられる。そのため、碑文は、神殿建設当初に作成された蓋然性が高く、そこに記された人名は当時の崇拝者たちとみなしてもよいであろう。アポロニオス 2 世が神殿を建設した時には、サラピス神を崇拝する崇拝者集団は小規模であり、社会的地位もいまだ低い状態にあったと考えられるのである。

2 神殿建設をめぐる訴訟

23-28、66-90 行では、神殿建設後に告発を受けたことが述べられる。告発理由についての記述はないが、告発がアポロニオス 2 世と神殿に対してなされていることから、神殿建設との深い関わりが予測される。ギリシアの都市国家では在留外国人身分（メトイコイ）の者には土地所有は認められておらず、市民権保持者だけに制限されていた⁽³³⁾。アポロニオスの家系が市民権を獲得したのは、アポロニオス 2 世の息子デメトリオス 2 世の代である⁽³⁴⁾。そのため、この土地購入は、市民権を保持しないアポロニオス 2 世によって行なわれ、この点に告発を受ける原因の一端があったと考えられる。さらに、外国人が新たに外来の神格を祀る神殿を建設する場合には、民会での承認が必要であった⁽³⁵⁾。碑文中には、その過程が完全に欠如している。彼は地所

(31) Wild, *op.cit.*, p.34ff.

(32) *IG XI. 4. 1216-1222.*

(33) 伊藤貞夫『古典期アテネの政治と社会』東京大学出版会、1982 年、155-157 頁。

(34) Brady, *op.cit.*, p.17.

(35) 齊藤貴弘「紀元前 5 世紀のアテナイにおける宗教と民衆—アスクレピオスの祭儀の導入を中心に—」『史学雑誌』106-12、1997 年、45-49 頁。

の購入を行なってから、すぐさま神殿建設に着手しているのである。おそらくアポロニオス2世は、民会の許しをえずに、無断で神殿建設を行なったために告発の対象となったのであろう。以上が法制度上から推測される告訴理由である。また、告発者たちは、テキストでは「ある人々 **ahqrwþwn tinwn**」(23行) または、「悪人たち **kakoisi**」(66行) と呼ばれているのみで、彼らがいかなる身分のものであったかといったような具体的な描写はない。アポロニオス2世、マイスタスの両者ともに、彼らの名を挙げることを避けている。これらの者たちについては、ルセルがデロス市民内の保守的集団を想定している⁽³⁶⁾。

アポロニオス2世は、デロス島に移住したエジプト人の3世代目である。彼がデロスの法を知らずに土地を購入し、神殿建設を行なったとは考えにくい。それでは、なぜあえて法を犯してまで神殿建設に踏み切ったのであろうか。それを考える上で参考となるのが、アテナイへのアスクレピオス神の分祠である。アスクレピオス神は、古典期ギリシアの宗教史においては、「新しい神」「民衆の神」の代表例とされ、ヘレニズム時代を通じてローマ帝政期まで繁栄した治癒神である。前420年、テレマコスという名の私人によって聖所と祭壇が建設され、アスクレピオス神はアテナイのエレウシニオンへ歓請された。テレマコスはアスクレピオス神の初代神官となった。翌419年、テレマコスは国家の承認なしにアスクレピオス神殿の拡張を企てて、ペラギコンと呼ばれていた聖域を侵している。それに対してアテナイのケリュケス氏族が異議申し立てを行なった。それから、アスクレピオス神は、悲劇作家ソフォクレスの家にしばらく間借りした後に、中心市に建設された神殿アスクレピエイオンに移った。その後、テレマコスと彼の一族は、アスクレピオス神祭儀が国家祭儀として導入される前4世紀の半ばまで、私的に祭儀を運営しつづけた。ここには私的に祭儀を運営していたテレマコス側と、アテナイの伝統的祭儀集団であったエレウシス神官団との確執が隠されていた。テレマコス側は、神託の権威を背景に最初の祭儀導入者として名誉を獲得しようとしていた。そのため、当初エレウシス神官団の管理下に置かれていたアスクレピオス神祭儀を、完全な自己の主導のもとで執り行なうことを欲したのである。他方でエレウシス神官団側は、制限つきでアスクレピオス神祭儀を受け入れ、管理下におくことで、エレウシス信仰の推進を意図していた。アテナイのアスクレピオス神祭儀導入には、私的要素と公的要素が折り合わされていたのである⁽³⁷⁾。

もちろん、前5世紀末のアテナイへのアスクレピオス神祭儀導入の際に発生した問題を、完全に前3世紀末のデロスでのサラピス神殿建設へ単純に敷衍させて考えることはできない。時代、場所もさることながら、前者のテレマコスはアテナイ市民であり、後者のアポロニオス2世はデロスの市民権を保有してはいなかったからである。しかし、神格が導入された当初、一

(36) Roussel, *op.cit.*, p.252. デロス島は、島全体で1つの都市国家を形成していた。デロス市民とは、都市国家デロスに市民権を有する者たちである。他方、デロス島には在留外国人や交易などの目的で滞在している者たちがいたため、デロス島の居住者が、必ずしもデロス市民とはかぎらなかった。

(37) 齊藤貴弘、前掲論文、45-49頁。

時的に他の場所に間借りを行なってそこに神像が安置されたこと、新たな神殿を建設する際に、係争が発生していること、崇拜が国家祭儀として導入されるまでに私的に祭儀が挙行されていたこと、これらの点は共通する。

サラピス神は、前3世紀前半にデロス島へ伝えられてから、前3世紀末に神殿が建設されるまでの間、「仮の住まい **eh nisqwtioij, mel aqrw**」(15-16、39行)に安置されていた。この仮の住まいがどこであったかは記されていない。だが、デロスはアポロン神崇拜の一大中心地であり、アポロン神殿が実質的な都市管理を行なっていた⁽³⁸⁾。さらに、アポロニオスは神殿建設に先立って、「他のどの神にも属していない他の場所 **mhd' a]ludij a]l lodapwi eh ouflei**」(52-53行)に神がやってくるように、と祈願している。これは、神殿の安置場所が、別の神の神域内であったことを示唆する。このため、アテナイでのアスクレピオス神の事例と同様に、サラピス神がエジプトから伝えられた当初の数十年間は、その祭儀はアポロニオスの一族が執り行なっていたが、アポロン神殿の神官団の管理下に置かれていたものと考えられる。アポロン神殿側は、サラピス神を自らの管理下に置くことで、神殿の権威を増大しようと考えていたのであろう。

アポロニオス1世は、サラピス神像を不承不承ながら、仮の住まいに安置した(39-40行)。サラピス神は夢の中で、仮の住まいに自らを安置したままでいてはならず、アポロニオス2世個人によって神殿建設を行なうように、と神託を下している(12-18行)。アポロニオス2世自身も、サラピス神に固有の神殿を建設することを欲している。これらのことは、アポロニオスの一族が、祭儀をアポロン神殿の管理下から独立させ、自らの主導の下で運営しようとしていたことを示す。そのため、移住当時は経済的理由からやむなくアポロン神殿に安置していた神像を、サラピス神固有の神殿へと移すため、法を逸脱してでも神殿建設に踏み切ったのであろう。アポロン神官団は、サラピス神を自らの管理下に置くことで、サラピス神の権威を制限するとともに、アポロン神殿における信仰促進を図っていた。そのサラピス神が、自らの神殿を離れて、新たに固有の神殿に住まうようになったため、アポロン神殿の神官団は告発に乗り切ったと推測される。このように、この告発は、デロス内での「公的」集団であったアポロン神官団と、「私的」集団であるアポロニオスの一族との間の係争であり、単に保守的集団が私的怨嗟のため引起したものとはいえないであろう。

裁判において要求された刑罰の内容は、「体刑を受けるか、罰金が支払われねばならない **ti/xrh\paqein h)apoteisai, h)ti/xrh\paqein h)ek tina tisai amibhn qwhj**」(25、69-70行)というものであった。アポロニオス2世は告発を受けた後、神に対して「不名誉な罰金を生じさせないように、悲運からの死を妨げるように」祈願しているため、「体刑」とは明らかに死刑を意味している。罪状が、神聖冒瀆ないし土地の不法購入であったと思われるので、このような刑罰が要求されたとしても不思議ではないであろう。

(38) Laidlaw, W. A., *A History of Delos*, Oxford, 1933, p.145ff.

さらに、アポロニオス2世のもとに下されたサラピス神による神託が語られ、裁判の記述へとつづる(81-90行)。人々は裁判所ではなく、「神殿に **naoij**」(81行) 召集された。この語はどこを指すのであろうか。エンゲルマンはさして説明を加えるわけでもなく、この神殿をサラピス神殿とし、裁判もここで行なわれたとしている⁽³⁹⁾。しかし、ここでの単語の用い方から、彼の解釈には疑問が残る。まず、碑文中で「神殿、神域」を指す語は、合計10回用いられている⁽⁴⁰⁾。これらの中で、複数形で用いられているのが、81行のこの箇所のみであり、ほかは全て単数形であらわされている。これら単数形で用いられている語はどの神殿を指すのかということを見ていく。14行 **Sarapieion** は、文字通りサラピス神殿であり、セラペウムAを指すので全く問題はない。29行では、マイイスタスが「神殿のために **uþer tou-iþrou**」その創建を書き記す、と語っている。ここでの「神殿」も、そのとき建設されたセラペウムAを指すのは明らかである。22行 **to iþon** と63行 **neioj** は、神殿建設に関する文章内で建設する神殿に対して用いられているため、セラペウムAと判断できる。10行の「神殿の中に **eh twi nawi**」という語句は、話者アポロニオス2世の父デメトリオスの肖像が安置されている場所を示している。デメトリオスの像は、神殿が完成した後に仮の住まいから、神殿に移されたと思われるので、この「神殿」もセラペウムAと解釈して間違いはない。23-26行は、告発が行なわれたことが記されている。この文章中24行の「神殿 **tou-iþrou**」は、我々、すなわち話者アポロニオス1世たちとともに訴訟対象となっているので、新たに建設されたセラペウムAである。49行の「神殿 **neion**」は、アポロニオス2世が、サラピス神に対して建設されるようにと祈願している神殿であるので、サラピス神殿を指すと解釈できる。59行 **neion** は、サラピス神による託宣の中で用いられている語であり、神はこの神殿を有名にするであろうとも語っている⁽⁴¹⁾ので、この語もセラペウムAを指すと考えられる。最後の93行で用いられている語は **nawi**、「我々の神殿に」いる神々という語句の中で用いられている。「我々」とは、一人称であって、語り手であるマイイスタスを含む表現である。そのため、この所有代名詞を添えられた神殿は、このとき建設されたばかりのセラペウムAを指すものと判断できる。以上のように、単数形で用いられている「神殿」は、全てセラペウムAを指していると解釈することができる。では、複数形で用いられている81行の「神殿」も、エンゲルマンの言うとおりにサラピス神殿を指すものであろうか。それ以外の箇所では単数形で表されているサラピス神殿が、この箇所のみ複数形を用いて表現されている、と考えることはできない。

ここで、「全ての市民」(82行) と「さまざまな国々のさまざまな民族の人々」(82-83行) が集められていることに注目したい。古代ギリシアの都市国家で行なわれた裁判は陪審員制であり、陪審員たちは希望する市民たちの中から抽選で選出された。デロス島から発見された史料にも、ただ一度だけではあるが陪審員の記述が見られることから、ここでも陪審員制にのっ

(39) Engelmann, *op.cit.*, p.52.

(40) 10、14、22、24、29、49、59、63、81、93行。

とった裁判が行なわれていたものと考えられる。裁判は、原告、被告、陪審員を中心に進行するわけであるが、もう1つ見逃してはならないのが、聴衆の存在である。ギリシアの裁判とは公開の場で行なわれる一種の競技であって、それを見物するために多数の人間が集う場でもあった⁽⁴²⁾。集まった人々は、裁判所が行なわれる建物の中で傍聴したわけではなく、建物の周囲で裁判を聴取した。

「全ての市民」と「さまざまな国々のさまざまな民族の人々」が、裁判を傍聴しに訪れたとすれば、傍聴者たちはかなりの人数にのぼったはずで、セラベウム A の規模と立地条件では、裁判を行なうのは不可能である。さらに、「神殿」が複数形で表されていることから、いくつかの神殿が集合した地区で裁判が行なわれた蓋然性が高い。デロス島では、市域の中心にアポロン神殿、アテネ神殿、ポロス神殿が集在している。さらに、陪審員たちは、アポロン神殿からの給金が支払われており、裁判自体がアポロン神殿に管理されていたことを思わせる。以上の理由から、裁判は、市域の中心に位置するアポロン神殿で行なわれたと考えてよいであろう。そこに、「さまざまな国々からさまざまな民族の人々」が集まったのは、デロスが海上交易の一中心地であり、諸地域からの人間が集まる場所であったからである。しかし、このように多数の人間が参集したのは、とりもなおさず、裁判の判決自体が一般的に関心をもたれていた問題であったためであると思われる。

裁判の結果は、アポロニオス 2 世側の勝訴であった。なぜ裁判に勝てたのか、アポロニオス 2 世はその理由を語ってはいない。ただ、裁判がおわって彼らが勝利した、とのみ伝えている。他方でマイイスタスは、勝訴の理由をサラピス神に帰している。つまり、サラピス神のはからいによって、訴訟を準備していた者たちは、言葉を発することができなくなった。そして、告発者たちは、光に打たれたかのように立ちつくしていた、というのである。このことから裁判は、告発者たちによって告発内容が公示されることすらなく終了してしまった、とみなされる。テキスト中から推し量る事ができる理由としては、多数の人々がその場に居合わせていたことがあげられる。先ほど述べたとおり、裁判にはデロス市民のみならず、デロス島に滞在していた外国人たちも多数立ち会っている。彼らの存在が、告発者たちに何らかの圧力をかけたと思われるのである。それは、デロス島でのサラピス神崇拜祭儀が、デロス市民や外国人たちによって、かなりの程度尊崇を受けていたことの証左ともいえるであろう。

以上が、IG XI. 4. 1299 から導き出せる、伝播と神殿建設に関する経過である。すでに前章で、アポロニオス 1 世による伝播については、私的に行なわれたことを述べた。では、前 3 世紀末の神殿建設は、プトレマイオス朝あるいは都市国家デロスによる宗教政策として捉えることができるであろうか。プトレマイオス朝は、前 260 年代のクレモニデス戦争末期、コス島沖の海戦で、マケドニアのアンティゴノス・ゴナタス率いる海軍に敗北し、キュクラデス諸島の支配

(41) Laidlaw, *op.cit.*, p.140.

(42) 「人々の集まり、集会、競技」を表す **αἴθρη** が、ひいては「裁判」という意味で用いられた。

(43) Laidlaw, *op.cit.*, p.140.

権を喪失した。前 250 年代に、エジプトはロドス島との親密な関係を利用して、再びキュクラデス諸島に権威を及ぼすようになる。しかし、前 245 年、アンドロス島沖の海戦でマケドニア海軍に破れ、プトレマイオス朝はエーゲ海での制海権をほぼ喪失した。これ以後、プトレマイオス朝が海上の主導権を握ることはなかった⁽⁴⁴⁾。前 245 年以降、前 3 世紀後半のキュクラデス諸島は、比較的⁽⁴⁵⁾自由であったとする見解もあるものの、おおむねはアンティゴノス朝の影響下にあったとする見方がつよい。そのため、前 3 世紀末にサラピス神殿建設に関して、プトレマイオス朝が何らかの働きかけを行なった可能性は低いと思われる。また、セラペウム A で発見された碑文もその根拠としてあげられる⁽⁴⁶⁾。この碑文は、デロス島のサラピス神殿で発見された碑文のうち、唯一王名が記されている碑文である。この碑文は人名を記した箇所⁽⁴⁷⁾に致命的な欠損があり、いく通りもの復元案が出されているが、王アンティゴノス・ゴナタス、王女フィラ、息子デメトリオス 2 世を示すものと解釈されている。アンティゴノス・ゴナタスの在位期間は前 277 年から前 239 年であった。サラピス神殿の建設時期は、前 220 年頃とアンティゴノス・ゴナタスの死後ではあるが、息子デメトリオスによって奉納がなされたと考えられる。いずれにせよ、プトレマイオス朝と対立関係にあったアンティゴノス朝からの奉納がサラピス神殿で発見されている事実は、プトレマイオス朝の宗教政策との見解と相容れないものである。このように、サラピス神殿建設を、プトレマイオス朝の影響と結びつけて考えることはできない。

他方で、都市国家デロスの宗教政策と見なすこともできない。都市国家デロスは、その存続を、その時々海上を支配する国家に大きく左右されていたため、その国家に対立する政策をとることはなかった。宗教政策の面でも、宗主権をもつ王の祝祭を幾度も創設し、好意を得ようと努めている。前 245 年以降から前 3 世紀の末までに創設された祝祭は、合計 11 にのぼった。その中で、アンティゴノス朝に関連する祝祭は、前 244 年のパネイア祭とソテリア祭、前 237 年のデメトリエイア祭、前 213 年頃のフィリッペイア祭、と 3 分の 1 を占める⁽⁴⁷⁾。これとは反対に、プトレマイオス朝と関連する祝祭は皆無である。このことから、デロスは前 245 年以降、アンティゴノス朝よりの政策をとっていたことが伺える。さらに、セラペウム A 建設に際して告発を受けていることも重要な論拠となる。デロスで宗教政策として神殿が建設されたのであれば、事前に評議会ないし民会の承認を必要としたはずである。しかし、アポロニオス 2 世は個人で地所を購入し、あくまで私的に神殿を建設しているため、事前に国家による承認があったとは考えられない。そのために建設後、係争を引き起し、裁判にまで発展している。また、彼が購入した地所も、都市の周縁部に位置し、長くうち捨てられ荒廃していた。そのため、都市国家デロスによる宗教政策の一環として神殿建設が行なわれたと見なすことはできない。

(44) Reger, *op.cit.*, pp.17ff. この時代のヘレニズム諸国とギリシアを中心とした東地中海の動向に関しては、合阪學「アンティゴノス・ゴナタスとその時代」『ARTES <宝塚造形芸術大学紀要>』16号、2002年、59-72頁で詳細に論じられている。

(45) Reger, *op.cit.*, p.17.

(46) IG XI. 4. 1215.

(47) Laidlaw, *op.cit.*, p.275.

以上みてきた通り、サラピス神殿建設は、プトレマイオス朝あるいはデロス島の宗教政策と考えることはできず、アポロニオスの一族主導によって私的に行なわれたといえよう。その私的に伝播されたサラピス神崇拜を、ギリシア人たちは受け入れていたといえる。

また、彼の一族による祭儀の運営は、前 180 年頃まで継続していたと考えられる。IG XI. 4. 1932 がその論拠となる。⁽⁴⁸⁾これはデロスの民会決議であり、内容はサラピス神祭儀の国家祭儀化である。この中で、「神殿管理者たち」を選出する第一の抽選は、「新たな 40 人の親類たち」のみではなく、「全市民」を対象とすることを決議している。第二、第三の抽選に関しては、碑文の欠損がはげしく、読み取ることはできない。だが、少なくとも最初に行なわれる抽選には、全市民が参加することがこのとき規定されたのである。これは、サラピス神祭儀を国家の管理下に置くことを目的として行なわれた決議であり、これ以降サラピス神殿での祭儀は、国家祭儀化したことがうかがえる。逆に、それ以前は「親類たち」によって神殿管理が行なわれていたと判断されるのである。この親類とは、アポロニオス 2 世の縁者たちを指していることに疑いはない。

このように、サラピス神のデロスへの伝播とその神殿建設は、私的に遂行されたと結論づけることができる。

3 デロス島におけるサラピス神崇拜の形態

次に、デロス島で行なわれたサラピス神崇拜の形態を考察する。デロス島での崇拜と、アレクサンドリアでの崇拜との比較を通じて、メンフィスからギリシアに伝播したサラピス神崇拜が、アレクサンドリアにおける崇拜と性格を異にするものであることを明らかにしたい。これによって、アレクサンドリアでヘレニズム化されたサラピス神崇拜祭儀の、ギリシア世界への伝播という、フレイザの理論に対する批判を試みる。分析の対象は、デロス島のサラピス神殿から出土した奉納碑文である。さらに、本論文が対象とする年代は前 3 世紀からサラピス崇拜祭儀が国家祭儀化された前 2 世紀初めまでなので、セラペウム A、セラペウム B から出土した奉納碑文が中心となる。

発見された碑文は合計 80 点である。⁽⁴⁹⁾これらの奉納碑文は、前 166 年以前に作成されたものである。これらの中で、神の名が読み取れる碑文が 71 点である。これらには、サラピス神以外の神格が刻まれている場合も含まれており、小アジアの大地母神キュベレへの奉納 1 点を除いて、すべてエジプト神ないしはギリシア神への奉納碑文、あるいはエジプト神とギリシア神の名が併記されている奉納碑文である。これらの中から、先のキュベレへの奉納碑文と、ギリシア神への奉納碑文とを除外すれば、残りのエジプト神への奉納碑文は、48 点となる。これは、神名が確認される碑文の約 68% を占める。サラピス神の名が記されている碑文は 35 点

(48) Cf. Brady, op.cit., p.32.

(49) IG XI. 4. 1215-1295.

で、全体の約49%にのぼる。サラピス神への奉納碑文がこれだけの数にのぼるという事実は、碑文が発見されたのがサラピス神殿であるため、当然といえよう。しかし、サラピス神の名があらわれる碑文35点中、イシス神、アヌビス神の名が併記されている碑文は32点と圧倒的な数に及ぶことは特筆すべきであろう。さらに、これら3神の名のいずれかが確認される碑文は、40点あり、サラピス神のみへの奉納はわずか1点である。これは、サラピス神殿における崇拜形式、サラピス神のみへの崇拜ではなく、サラピス神、イシス神、アヌビス神、これら3神への崇拜が中心であったことの証左といえよう。これら3神の相互関係であるが、イシス神はサラピス神の配偶者であり、アヌビス神は両者の息子であると、信じられていた⁽⁵¹⁾。

このことは、前節で扱ったサラピス神殿建設碑文からも確認できる。この碑文前半でアポロニオス2世は、「相応の喜びを捧げて神々を称賛する」(28行)、と語っている。すなわち、彼はサラピス神のみではなく、複数の神々を念頭においているのである。また、碑文後半において、マイイスタスもサラピス神以外の神々に配慮している。彼は、サラピス神の無数の驚くべき奇跡がエジプトとギリシアで語られると共に、サラピス神の「配偶者イシス神の」奇跡も同様に語られている、と述べている(32-33行)。サラピス神と同一視されるオシリス神は、イシス神の夫神である⁽⁵²⁾。このことから、サラピス神への賛歌において、イシス神の名があらわれることは当然かもしれない。しかし、神殿を建設する段で、「神々を称える宴のために」あらゆるものが準備された、と語られている(65行)。また裁判において、奇跡を行なったとされているのは、サラピス神とサラピス神の「配偶者」(85行)である。さらに、賛歌の末尾では、

セラペウム A-C より発見された奉納碑文 (前166年以前)

奉納対象	点数
サラピス・イシス・アヌビス	32
サラピス・イシス・	1
イシス・アヌビス	1
サラピス	1
イシス	3
アヌビス	1
サラピス・イシス・アヌビス・ハルポクラテス	1
他のエジプト神	8
エジプト神とギリシア神	2

IG XI. 4. 1215-1295 より作成

(50) Vidman, Ladislaus(collegit), *Sylloge inscriptionum religionis Isiacaе et Sarapiacae*, Berlin, 1969, p.62ff.; Fraser, Two Studies, p.22; Dow, op.cit., p.227.

(51) Assmann, Jan, *The Search for God in Ancient Egypt*, p.80.

(52) *Ibid.*, p.180.

神殿建設と裁判の勝訴に対して、「我々の神殿にあられる神々である、あなたの同僚者たちもお喜びなのです」、とマイイスタスは語っている。よって、デロス島のサラピス神殿では、最初の神殿であるセラペウム A の建設当初から、イシス神を含む複数の神々が崇拜されていた。それは、エジプトから伝来したサラピス神、イシス神、アヌビス神であったのであろう。

また、ギリシアの神と併記されている事例は、2点のみである⁽⁵³⁾。それぞれ、「ディオニュソス神とサラピス神」、「ヘルメス神とアヌビス神」である。よって、エジプトの神格をギリシアの神格に習合させる傾向は、ほとんど見受けられない。

これに対してプトレマイオス朝時代のエジプト、アレクサンドリアを中心として崇拜されていたサラピス神は、王朝崇拜祭儀と密接な関係をもっていた。フレイザは、エジプトで発見されたサラピス神に関連する約 200 点の私的奉納碑文を、内容から 5 つのグループに分類している⁽⁵⁴⁾。その分類とは、①王や女王、つまり王室成員へ奉納が行なわれているもの。この場合王室成員の名は、与格形で示されている。②王室成員の「ために (u ϕ er)」と記されているもの。③王室成員のために、神々へ奉納されているもの。④単にある神へとのみ記されているもの。⑤神々と王室成員へ奉納されているもの。これらの 5 グループである。奉納碑文は、2 点を除いて全て前 3 世紀に属するものであり、大部分が前 3 世紀後半のものである。また、前 3 世紀に属する碑文の出土場所はアレクサンドリアである⁽⁵⁵⁾。すなわち、大部分の碑文が、初期のプトレマイオス朝の王、特にプトレマイオス 2 世フィラデルフォスと 3 世エウエルゲテスの時代に属し、崇拜が行なわれていた中心地はアレクサンドリアと言えるのである。

これら奉納碑文の中で、注目に値するのが、⑤である。これは、奉納が行なわれた当時、在位していた王、女王と、サラピス神ならびにイシス神の名前が与格形で表されている碑文である。この分類に属する碑文は、200 点中わずか 6 点ではある。だが、サラピス神、イシス神以外の神と王名が併記された碑文は、全く発見されていない。これは、サラピス神と王朝との特別な関係が意識されていたことを示す。すなわち、私的崇拜においても、王朝との関連が意識されていたのである。

また、ゼノン＝パピルス文書内のエジプトの官僚ゾイロスから宰相アポロニオスへの書簡で、「もしアポロニオスが神の命に従って、サラピス神殿を建設するのであれば、神は王と共にアポロニオスを偉大にし、身体の健康と名誉を与えてくれるであろう」と、述べられている⁽⁵⁶⁾。このことから、エジプト国内でのサラピス神崇拜は、王朝との密接な関係をもっていたことがうかがえる。サラピス神殿建設は、王への忠誠心を示す行為として認識されていたのである⁽⁵⁷⁾。

さらに、奉納を行なった人物は、エジプトに在住していたギリシア人たちであり、彼らはプ

(53) *IG XI. 4. 1224, 1235.*

(54) *Fraser, Two Studies, p.5.*

(55) アレクサンドリア以外で発見された奉納碑文は、3 ないし 4 点である。

(56) *Edger, C. C., Zenon Papyri, 4 vols, 1925-1931, no. 59,034.*

(57) *Fraser, Two Studies, p.41.*

トレマイオス朝の上層階級を形成していた人々であった⁽⁵⁸⁾。これに対して土着のエジプト人たちは、サラピス神崇拜に傾倒したという証拠は皆無である。サラピス神崇拜には、エジプトの神官団は全く関わりをもたず、従来のオソルハピ神崇拜を継続していた⁽⁵⁹⁾。王朝主導で行なわれたサラピス神崇拜祭儀は、ギリシア人にも限定され、王朝の好意を得る目的で行なわれたものと言えるのである。

以上のようにサラピス神に対する崇拜や奉納は、王の好意を得ることを目的としており、そこには、「王のために」あるいは、「王と王妃のために」という文章が添えられていた。奉納者もギリシア人エリートやギリシア人傭兵たちを中心としていた。他方、土着のエジプト人たちについては、従来どおりオソルハピ神を継続して崇拜していた。また、サラピス神、イシス神とともにアヌビス神の名が併記される事例は、エジプトでは全く存在しない。これらのことから、プトレマイオス朝のアレクサンドリアを中心とするサラピス崇拜とデロス島で行なわれていたサラピス崇拜とは、ともにメンフィスを起源とするものながら、性格を異にするものであることがわかる。この相違は、アレクサンドリアで行なわれた崇拜は、プトレマイオス朝の宗教政策として導入されたのに対して、デロス島への伝播はエジプト人神官であったアポロニオス1世によって私的に行なわれたことに端を発するものである。そのため、デロス島への崇拜伝播は、アレクサンドリアを経由せずに、メンフィスから直接伝えられたものであったと考えることができる。

おわりに

ここまでの結論をまとめると、以下ようになる。プトレマイオス朝治下のエジプトで国家祭儀として導入されたサラピス神崇拜祭儀は、エジプト人神官によって私的にデロス島へと伝えられた。この崇拜は、アレクサンドリアで行なわれていたプトレマイオス王朝主導の祭儀と形態を異にするため、メンフィスから伝えられたオソルハピ神崇拜が、デロス島で独自に発展したものである、と考えられる。前2世紀初頭までは、祭儀も私的に運営されてきた。

ヘレニズム史の通説によれば、この時代にはコスモポリタンの世界が現出した。これは、「ポリス世界の崩壊後生まれた新しい世界」である⁽⁶⁰⁾。ポリスの自治が失われ、王朝が各地に成立することで、ギリシア人たちは広大な地中海世界を意識するようになり、古典期とは違った世界が現出したと考えられているのである。しかし、この見解は近年の研究によって疑問が投げかけられている。近年では、古典期からの連続性を強調する傾向が強い。ポリスが「市民の共同体」としての性格を失うのは、前1世紀になってからだ、という見解が強く主張されるよう

(58) Ibid., p.18ff.

(59) 金澤良樹「ヘレニズムのエジプトにおける土着文化および社会の変容と不変容—古代地中海世界に於ける先進高度文明と地域的伝統文化—」『地中海学研究』10、1987年、51-52頁。

(60) 大戸千之「ヘレニズム時代の「コスモポリタニズム」について」『立命館文学』551号、1997年、305頁。

になってきている。

このことは、ヘレニズム時代の宗教史に関してもあてはまることであろう。従来は、ヘレニズム時代のギリシア人たちの意識を支配していたのは、「自由の恐怖」⁽⁶¹⁾であったと考えられてきた。都市の自治が喪失し、王朝が成立することで、ギリシア人たちは突如広大な世界へ投げ込まれた。そのため、旧来の都市に根ざした崇拜は減退し、支配者崇拜祭儀が興隆した⁽⁶²⁾。また、拡大した自由から逃避するために、人々は厳しく決められた運命を求めて、占星術、「運命」崇拜へと傾倒した。このような観点から、ヘレニズム宗教史は論じられてきたのである。

しかし、エジプトからデロス島へのサラピス神崇拜伝播に関しては、前述のような理解は成り立たない。サラピス神崇拜は、エジプトのメンフィスから私的に伝えられ、ギリシア人たちもアレクサンドリアでヘレニズム化の過程を経ていないサラピス神崇拜を受け入れていた。ヘレニズム時代以前、ギリシア人たちは、アルカイック期、古典期を通じて、周辺地域の宗教を常に取り入れてきた⁽⁶³⁾。前5世紀には、アテナイで小アジアから伝播したキュベレ神とアッティス神の崇拜が繁栄した。前4世紀には、エジプトからオシリス神とイシス神の祭儀がアテナイに伝えられている。デロス島へのサラピス神崇拜伝播も、このような伝播の流れと軌を一にするものと捕らえることができよう。ヘレニズム時代のギリシア人による王国の成立とともに、王朝崇拜祭儀の隆盛など、新たな宗教的側面がつけ加わったことは無視することはできない。しかし、いままでのように変化の側面のみでなく、古典期との連続性もたしかに存在していたのである。つまり、外世界からの神格の受容はヘレニズム時代にいたっても継続して行なわれてきた。そのことの一事例として今回のサラピス神崇拜伝播をあげることができよう。なお、ヘレニズム時代におけるサラピス神崇拜祭儀のギリシア世界への伝播に関しては、デロス島にとどまらず、広く他地域においても確認されるが、その分析については今後の課題としたい。

(61) E. R. ドッズ『ギリシア人と非理性』みすず書房、1972年、287-324頁。

(62) 同上、294頁。

(63) Burkert, W., *Greek Religion*, Cambridge, 1985, pp.176ff.